近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動

——上海・墨海書館を中心に

劉　建　輝

一　上海に集まる宣教師とその著作活動

一八五〇年代、かつて長らく広東で展開されていた中国の対外交渉は単に貿易や交通のみならず、いわゆる情報のネットワークも「新開地」である上海を中心に再編されはじめた。これはたとえば、アヘン戦争前から一貫して西洋情報伝達の担い手であるプロテスタント宣教師たちの動向を見ればその事情は実によくわかる。というのは、アヘン戦争後、五つの開港地に散らばっていったこれらの宣教師は、この時期に入ると、伝道上の便宜のためだと思われるが、つぎつぎと上海に集まり、貿易や交通ネットワークの中心となりつつあるこの土地を自らの新拠点として活発に布教の準備活動を開始したのである。

プロテスタント宣教師として、最初に上海に入ったのは、イギリス倫敦会所属のメドハースト（麦都思）とロックハート（雒魏林）であった。二人は、上海開港直後の一八四三年に各自の従来の根拠地だった広州と舟山の定海からここに移り住んだが、その際に、彼らはまたもともとバタビアにある倫敦会の印刷所と定海にあるロックハートの診療所を一緒にこの新天地に移転させた。そして後述するように、それぞれ墨海書館、仁済医館と命名されたこの二つの施設に、後に同じ倫敦会所属の教会——天安堂も加わり、三者がメドハーストの中国名＝麦都思にちなんだ「麦家圏」（今の山東路付近）という場所で大いに発展し、倫敦会のみならず、上海におけるプロテスタント全会派の一大活動拠点となったのである。

メドハーストは、もともとかの有名なロバート・モリソンに随行して、いわゆる南洋でプロテスタント伝道を開拓した人物で、モリソン没後は、実質上その後継者として、倫敦会の中国伝道において

中心的な役割を果たしてきた存在である。したがってその彼の上海移住はきわめて重要な意味を持っており、それは極端に言えば上海がプロテスタント伝道の新たな中心地となることをそのまま示しているような出来事でさえあるのである。現に、その後まさしく彼の監督下にある墨海書館は一五年以上にもわたってキリスト教出版界に君臨し、二五万部近くの漢訳聖書[1]と一七一種類の漢文伝道書や科学書を世に送り出したし、また彼個人や墨海書館などの存在に引き寄せられて三十数名の宣教師が相次ぎこの土地に居住するようになったのである。[2]

そしてその多くの宣教師は、伝道のかたわらあるいは自ら著述し、あるいは欧米学者の著書を翻訳する形で、実にさまざまな西洋知識を多数中国に紹介した。それらの著作の主なものを分野ごとに紹介すると、たとえば、天文・地理学では、ミュアーヘッド（慕維廉）が一八五三年から五四年にかけて『地理全志』を著し、西洋近代地理学について在来の人文地理学のみならず、自然地理学の内容も加えて詳細かつ簡明に解説した。またウェイ（韓理哲、彼は寧波を根拠地にしていた）が、一八五六年に自著の『地球図説』を大幅に改訂し、まだ中国の知識人に十分に認知されていない地球球体説や太陽中心説の説明と各国の国勢の紹介に努めた。そしてこれは著者としての著述ではないが、ワイリー（偉烈亜力）が一八五九年に、かつてイギリス天文学会の会長も務めたジョン・ハーシェル（侯失勒約翰）の名著『天文学概論』（一八四九年初版）を『談天』という書名で翻訳し、コペルニクスからケプラー、そしてニュートンに至るまでの西洋近代天文学の流れとその最新の研究成果を体系的に紹介したのである。

次いで歴史学では、同じミュアーヘッドが一八五六年にトーマス・ミルナーの『英国史』を『大英国志』として漢訳し、「政教の美が東西州に冠を為す」「全盛の国」（漢文序文）であるイギリスの二〇〇〇年の歴史を王朝ごとにたどったが、中でもその政治制度については、「巴力門議会」（国会）の「労爾徳士」（上院）と「高門士」（下院）の二院制や「推選」の制限選挙制、下院の主導的な立場などを簡潔に解説し、従来の『海国図志』などでははっきりと説明できなかった知識を明確に提示した。またブリッジマンも自らの『美理哥合省国志略』の再増補版として一八六一年に『聯邦志略』を著述し、新興国であるアメリカの独立史をはじめ、その政治、経済、教育、宗教、それに各州の具体的な情況などについてきわめて体系的に紹介した。

そして数学・物理学では、ワイリーがまず一八五三年に『数学啓蒙』を著し、西洋数学の初歩的な知識を解説したほか、続いて一八五七年にマテオ・リッチが前半しか訳せなかったユークリッドの『幾何学入門』の後半を『続幾何原本』として訳し、リッチの翻訳から二五〇年を経てついにこの古代ギリシャの名著を完訳した。そ

の後、彼は一八五八年にまた『重学浅説』を刊行し、漢文によって初めて力学を中心とする西洋近代物理学についての解説を試みる一方、翌年にはさらにイギリスの数学者De Morgan（棣麼甘）の『代数初歩』（一八三五年）を『代数学』、アメリカの数学者Loomis（羅密士）の『解析幾何と微積分初歩』（一八五〇年）を『代微積拾級』という書名で翻訳し、特に後者において初めて西洋近代数学の知識を中国に紹介したのみならず、同時に多くの新しい数学用語、たとえば係数、函数、変数、微分、積分なども作り出したのである。

これらの分野以外でも、たとえば医学ではロックハートの後を継いで仁済医館の管理を任せられたホブソン（合信）の『全体新論』（一八五一年広州初版、一八五五年墨海書館再版）『西医略論』（仁済医館、一八五七年）『婦嬰新説』（仁済医館、一八五八年）『内科新説』（同上）や、博物・生物学では同じホブソンの『博物新編』（一八五五年広州初版、同年墨海書館再版）、ウイリアムソン（韋廉臣）の『植物学』（墨海書館、一八五九年）など、いわゆるプロテスタント宣教師による漢訳洋書は実に枚挙に暇がないほど多数存在している。そしてまさに彼らのこの瞠目すべき活躍によって、上海は急速に西洋情報発信地として発展し、一八五〇年代後半にはもう完全に自らを中心とした一大情報ネットワークを形成したのである。

二　西洋情報の「生産基地」——墨海書館

ところで、ミュアーヘッドやワイリーを始めとするこれらの宣教師たちが、なぜ一八五〇年代に入って突如これだけ集中的に漢文著作を刊行したのだろう。それにメドハーストを除いて、中国滞在が決して長いとは言えないこの人たちがまたどのようにしてあの抽象性の高い西洋科学書などを漢文に翻訳できたのだろう。上記のその活躍を確認した後、おそらくだれしもが抱く疑問である。これらの問いに答えるために、以下は、彼らの具体的な日常活動、その取り囲まれた環境、とりわけ墨海書館というその情報生産を可能にした「現場」の様子をすこし紹介してみたい。

先ほどもすこし触れたが、墨海書館というのは、つまりメドハーストが一八四三年に自分の移転とともにもともとバタビアにあった倫敦会の印刷施設を上海に移して設立したものである。その所在地は、最初の二年ほどは上海県城東門外にあるメドハーストの借家の一階にあったが、その後一八四六年に、今度は同県城北門外に新築された二階建ての一軒家に移った。この近くには墨海書館のほかに同じく新築されたメドハーストの自宅や仁済医館もあり、また後に天安堂という教会も建てられたのである。前述の麦家圏は、言わばこれらの施設が集中している一角を指しているのにほかならない。

設立当初の墨海書館には、わずか手動の印刷機一台と欠字の多い

金属活字一セットしかなく、それに印刷工も中国人の青年一人しかいなかった。そのためにあり合わせの活字と照合しながら文章を作らなければならず、きわめて苦しい作業を強いられたという。その後一八四七年になると、まもなく大量の聖書印刷の時代を迎えるために、倫敦会本部から一台のツインシリンダ式印刷機が届けられ、またそれに先だって専門の印刷職員であるワイリーも派遣された。むろん墨海書館は設立直後の一八四四年にすでに伝道用小冊子の印刷を開始したが、しかし前述の活躍につながるような運営は、やはり新しい機械と職員の到来によってはじめて可能となったのだろう。ちなみにこのシリンダ式印刷機は一日数万枚も印刷できたと言われている。

一八四〇年代後半の墨海書館について、後に宣教師たちの中国語助手となった王韜は当時の様子を次のように記している。

時に西士の麦都思、墨海書館を主持し、活字板の機械を以て書を印ず。竟に創見と謂う。余、特に之を往き訪ぬ。竹籬花架、菊圃蘭畦、頗る野外の風趣有り。其の室中に入れば、縹緗架に挿して、琳琅目に満つ。麦君に二女有り。長きは曰く瑪梨、幼きは曰く亜瓔、皆、出でて相見る。（中略）

後に印書を観るに導かる。車床、牛を以て之を曳き、車軸、飛ぶが如く旋転す。一日に数千番を印ずべしと云う。誠に巧みにして捷きなり。書楼、倶て玻璃を以て窓牖を作り、光明にして織翳無し。洵に琉璃の世界に属するなり。字架、東西に排列し、位置、悉く字典に依りて、分毫の紊乱も容ぜず。

麦君と同じく一処に在る者、曰く美魏茶、曰く雒頡、曰く慕維廉、曰く艾約瑟、咸中国の語言文字を識る。

（『漫遊随録』、一八八七年）

牛の動力で活字の印刷機械をまわす、この事実はおそらく当時の中国人にとってよほど珍しいことであっただろう。別の文章で王韜はこの西洋舶来のまったく見慣れない機械についてさらに詳しく記している。

西人は印書局を数ヵ所設置したが、そのもっとも著名なのは墨海である。そこには鉄材で製造された印書車床（印刷機械）があり、長さは一丈数尺で、幅は三尺ほどである。両側に重い歯車が二つ付いており、そこに二人ずつ協力して印刷を行う。牛の動力でその歯車を回転させながら、推し出したり引き込んだりする。その上には大きな空軸が二つ吊るしてあり、それをベルトで下の機械と連係させて紙を送りこむ。一回転する毎に紙の両面に印刷されて、甚だ簡単でしかも速い。一日に四万枚余も印刷することが可能である。字は活版で、鉛で鋳造し、墨

はゼラチンと煤の油を混ぜて練成したものである。印床の両側に墨槽が付けてあり、鉄製の軸でこれを回転させれば、墨が平板に運ばれる。その傍に幾つかの等間隔に排列された墨軸が連なっていて、平板の上にある墨を塗り付けながら活字板に送り込み、こうすることによって墨の濃淡がおのずと消えてしまう。墨が均等に印刷されるので文字は当然はっきりしており、とても中国在来の印刷などの比ではない。印書車床を動かすにはおよそ牛一頭の力が必要であるが、牛を使うのは、水火二気（蒸気）の代用にほかならない。

（『瀛儒雑誌』、一八七五年）

周知のように、アメリカのR・ホーによって蒸気輪転印刷機が発明されたのは、一八四六年である。墨海のシリンダ式印刷機が導入されたのは一八四七年の秋だそうだから、どうやらこのホーの輪転機の可能性は薄い。しかしそれでもその一世代前の輪転機であることは間違いがなく、当時においてはきわめて先端的な機械である。その優れた性能は、やがて「聖書」やその他の書籍の印刷において大いに発揮され、一八五〇年代を通して、墨海書館を支える原動力の一つでさえあったと言っても過言ではない。

三　麦家圏で誕生した漢訳聖書

このように、設立当初の墨海書館の様子を知るために、まずその「看板」とも言える輪転印刷機を見てきたわけだが、しかしこの機械を導入したのは、あくまで新しく翻訳された「聖書」の印刷のためであったので、その意味でここではやはりその最大の事業である聖書漢訳の「現場」もすこし検証しておかなければならないだろう。

中国でプロテスタント宣教師として最初に聖書漢訳を手掛けたのはやはり前述のロバート・モリソンであった。一八〇七年に来華したモリソンは、はじめはほとんど一人の力でまず一八一三年に「新約聖書」を翻訳し、続いて彼の後に派遣されてきた同じ倫敦会のウイリアム・ミルン（米憐）の協力を得て一八一九年にまた「旧約聖書」の漢訳を完成させた。そしてこの両者をあわせて一八二四年に『神天聖書』（一名『聖書全書』）として刊行し、これはいわば中国における最初の完訳聖書である。しかしこのモリソン訳の聖書には、表現上多くの問題があり、中国人にとってきわめて難解だったと言われている。(3)

この事態を受けて、その後来華したメドハーストやギュツラフ、それにブリッジマンらも加わっていわゆる改訂事業を行った。彼らはまず共同で一八三七年に「新約」を『新遺詔書』として刊行し、次いでギュツラフ一人で一八三八年に「旧約」を『旧遺詔聖書』として改訂、刊行した。これで一応「神天聖書」の最初の改訂版が完成したわけであるが、この改訂版に対して、その後ギュツラフがまた不満を覚えたらしく、今度は単独で『新遺詔書』を改訂し、一八

四〇年に『救世主耶蘇新遺詔書』を刊行したのである。

しかし、教養のあるネーティブ・スピーカーの参加しないところで翻訳された聖書はやはり不評だったようである。そのために、倫敦会を始めとする各会派の代表が一八四三年に香港で会合し、今後の改訳事業をめぐって協議した結果、新たにメドハーストを責任者とする翻訳委員会を組織し、その代表委員会による聖書漢訳の決定版を作ることを決めたのである。

このように、メドハーストや既述のミルンの子息であるチャールズ・ミルンなどの五人からなる代表委員会は、およそ一八四七年六月頃から上海麦家圏のメドハースト宅に集まり、ほとんど毎日のように「朝十時から午後二時半まで」中国人の助手を入れた形で「一字一句を推敲しながら」[4]決定版になる聖書の翻訳を開始した。そして彼らのこうした努力によって、ついに一八五〇年に「新約全書」（一八五二年刊行）、続いて一八五三年に「旧約全書」（一八五五年刊行）の漢訳を完成させた。

余談であるが、この翻訳の過程で「God」の訳語をめぐって、メドハーストを始めとするイギリス系宣教師とブリッジマンを中心とするアメリカ系宣教師の間で論争がおこり、前者は「上帝」と訳したのに対して、後者は「上帝」には現世的なイメージがつくので「神」であるべきだと主張した。結局両者の意見が折り合わず、それぞれ「God」を「上帝」とする訳本（大英聖経会出版）と「神」とする訳本（美華聖経会出版）を刊行することになった。ちなみに日本で「God」を「神」と訳したのは、つまり明治初期にアメリカ系訳本の影響を受けたからにほかならない。

この決定版である代表委員会訳聖書は好評であった。特に「新約全書」のほうは一八五九年にすでに一一版を重ね、その後も一九二〇年代まで使われていたと言われている。この成功の裏に実は一人の隠れた功労者がいる。先ほど黒海書館の様子を語ってくれた王韜である。翻訳スタッフに彼が参入したことによって、訳文がまったく一新され、すぐれて洗練されたものになり、後に「文理聖書」という美名さえもらったのである。[5]

四　墨海書館の「浪人」秀才たち

王韜は一八二八年江蘇省甫里の生まれで、少年時代から文章に「奇気」があると言われたほどきわめて有能な知識人である。彼は一七歳の時に科挙の最初段階の試験――県試に合格し、秀才（生員）となったが、その後の郷試に失敗し、官僚として出世する道を絶たれた。そして一八四九年、王韜は亡き父の後を継いで一家六人の家族を養うために上海に至り、メドハーストの中国語助手として墨海書館に住み込み、以後一三年にもわたってここで雇い人として働いた。

前述のように、墨海書館に入った当初、王韜は主に代表委員会に

よる聖書の翻訳を手伝っていた。それは具体的には、つまり宣教師たちの訳文を添削し、その文章を中国語らしく潤色すればいいわけで、彼にとってきわめて楽な仕事であった。しかし宣教師からは、このような教養のある中国人助手を雇うのはまったく初めてということもあって、その文人としての才能は、聖書に続いて多数の賛美歌の添削も依頼されるほど、非常に高く評価された。そしてこういう厚い信頼のもとに、その後、聖書などの翻訳が一段落すると、彼はまず一八五三年にエドキンズ（艾約瑟）と一緒に「格致西学提綱」を翻訳し、また一八五七年からワイリーと協力する形で後述する「六合叢談」という雑誌を編集しながら、既述の『重学浅説』なども刊行した。

しかし、墨海書館に対する王韜の貢献はこれだけにとどまらなかった。彼の紹介でその後、一八五二年に数学者の李善蘭、翌年に文学者の蔣敦復などの中国知識人が相次ぎ墨海書館に入り、彼と同じ仕事に従事しはじめた。[6] たとえば、前述のワイリーの『続幾何原本』『代数学』『代微積拾級』『談天』やウイリアムソンの『植物学』などは全部李善蘭との合作でできた訳著であり、またミュアーヘッドの『大英国志』も蔣敦復の協力を得て作成されている。そしてこの三人の活躍が一つの手本となって、その後も医学に詳しい管嗣復や天文学の教養を持つ張福僖など合わせて十数人が、期間の長短こそあれ、みな墨海書館に身を寄せたことがある。[7] 中でも管嗣復はホブソンの『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』の漢訳を助けたのみならず、非倫敦会所属のブリッジマンの自著『美理哥合省国志略』（『聯邦志略』）の改訂にも手を貸している。

この人たちは、王韜と同様、いずれも秀才にはなったものの、その次の科挙試験に失敗しており、いわば「浪人」のような存在である。官僚への道を絶たれた彼らにとって、墨海書館はその高い報酬ということもあって、適材適所と言わないまでも、決して居心地の悪い場所ではなかったと思われる。ましてや李善蘭のように「翻訳」という行為を通してある程度自己実現ができた人も存在している。それに彼らが墨海書館に来た時期は、ちょうど書館の聖書漢訳の事業が一段落し、宣教師たちがようやく西洋事情や科学書の翻訳に時間を割り当てる余裕ができたところで、まさにこの二つの条件がうまく重なったからこそ、いわゆる漢訳洋書の量産がはじめて可能となったのである。一八五〇年代に入って宣教師による漢文著作が一斉に増えた歴史的背景は、ほかならぬこうしたところに存在している。

五　「郭嵩燾日記」と「王韜日記」に見る墨海書館の日常

ここに、この最盛期の墨海書館を記録する文章が一つ残されている。作者は、後に初めて中国のイギリス駐在公使を務めた郭嵩燾と

いう人物である。ちなみにこの時、彼はちょうど太平天国を鎮圧する曾国藩の配下におり、塩税などによる資金調達の仕事に従事していたが、上海に来たのはおそらくそうした軍務の一環としてだったのだろう。

その後、墨海書館を訪ねた。そこの麦都事（思）という人は、西洋の宣教師で、自ら墨海老人と号している。その住居の前半部は礼拝堂で、後半部の客間には多くの書籍が並べられている。東西の窓際に球状の模型が一個ずつ置かれ、右側は天球儀で、左側は地球儀になっている。麦君は著述にきわめて勤勉な人で、その彼の文章を校閲しているのは、一人は海塩の李壬叔（李善蘭）で、いま一人は蘇州の王蘭卿（王韜）である。李君は非常に博識で、ずっと数学を習っているという。王君は豪快闊達で、またなかなか風流な人である。『数学啓蒙』という本を探してくれたが、これは偉烈亜力の著作である。偉君はごく平凡な相貌の持ち主で、特に数学を専攻している。また艾君（艾約瑟）という人がいるが、彼はもっとも学問が優れており、麦都事（思）から図書管理の仕事を任されている。ほかに数冊の「遐邇貫珍」を贈られた。その（各冊の）前半には科学に関する文章が若干載せてあり、その後は全部国内外記事の抜粋で、すなわち「新聞紙」というものである。（中略）王君は家族とともにここに住んでいる。その居室に「短衣匹馬随李広、紙閣蘆簾対孟光」という聯が掛けてあり、なかなか情趣のあるものである。その仕事を聞けば、毎日図書室に二、三時間出勤して、彼ら（西洋人）の著述にある文法的な誤りを直し、その文章を漢文らしく添削するのみであるという。

（「郭嵩燾日記」一九五六年三月一五日）

一説によれば、郭嵩燾が後に西洋事情に関心を持ち始め、さらに洋務運動をリードする開明派官僚となった最初のきっかけは、つまりこの時の上海体験、とりわけ墨海書館での見聞であったという。[8] これは、むろんあくまでその作者の推測にしかすぎないが、しかし、この推測はおそらく正しいと思われる。というのは、この時期の墨海書館はたしかにもう一部の中国知識人にある種の「衝撃」を与えるような場所になっており、その存在はあたかも「西洋」を中国社会に紹介する一つの窓口のような役割を果たしているからである。これは前記のいくつかの引用からすでにその一端を察知できたかもしれないが、その様子をより詳しく伝えるものとして、ここでさらに王韜のこの間の日記を紹介してみよう。

「王韜日記」[9]をひもとけば、その風流文人との交遊を記す多くの記録の中で、一際目立つものとして、まずは本人も含めて墨海書館の関係者らがかなり頻繁に中国の知識人に「西書」（漢訳洋書）を贈

る記事が挙げられる。その相手は彼らの一般の友人に限らず、たとえば上海道台（地方長官）だった呉健彰のような高官も含まれており、また「合衆教士、「合信医書」数冊を售ろうと欲して日本に寄す」（一八五八年一二月二五日）というように日本もその目標になっている。むろんこれには「伝道」という目的も抱き合わせになっており、かならずしも純粋の「啓蒙」活動とは言えないが、しかしそれでもこうした行為の中に墨海書館の情報発信地としての面目が躍動していると言えよう。

図書贈呈に次いでよく見られる記事は、地方からさまざまな人が訪ねてきて書館の印刷機械などの設備を見学する内容に関するものである。この中に、たとえば後に江蘇巡撫に昇進した徐有壬や初代日本駐在副公使の張斯桂などもおり、墨海書館が中国の有力な知識人にいよいよ影響力を及ぼしたことを窺わせている。ところで、設備見学をめぐる記事で、もっとも興味をそそられるのは、やはり宣教師による蒸気機関の実演で、たとえば一八六〇年一月二七日の日記に「西士偉烈の火輪器を試すのを観る。水が沸き気が湧り、行転甚だ速し」と記されている。その後もこういう記述が何度か見られるので、どうやら墨海書館では不定期にこういう実験を行い、中国人に見学させたようである。ちなみに王韜ら自身も「照影法」などを勉強して、友人宅で写真撮影を実践したと記録されている。

この他にも、たとえば牛肉の試食や「夷礼」（西洋式）で行われた友人の結婚式、また西洋婦人によるバイオリンの演奏など、いわゆる西洋の「日常」が随所に記録され、当時の墨海書館の様子と彼らの関心の所在を伝えている。むろん中にはこういった一方的な受容ではなく、ワイリーらと論争して「西国政の大謬」を批判し、中国の「太古の風」を主張するような記事も見られ、王韜をはじめとする当時の中国知識人における西洋認識の複雑な一面を覗かせている。

このように、墨海書館は第一次アヘン戦争直後から第二次アヘン戦争（アロー戦争）終結までのおよそ二〇年近くの間、前記の宣教師や「浪人」秀才たちの活躍によって、単に漢訳洋書を刊行する西洋情報発信地としてのみならず、いわゆる「生きた」西洋の窓口としても大いにその役割を果たした。あえて「伝道」の要素を除いて言うならば、まだ官営の洋学機関が設立されていない当時の中国において、その存在は、ちょうど江戸幕府の「洋学所」（一八五五年設立）と類似しているかもしれない。ちなみに中国の「洋学所」にあたる京師同文館や上海広方言館、また江南製造局翻訳館は、いずれも一八六〇年代に入ってから設立されたもので、墨海書館よりは二〇年近くも後れている。したがって、その存在の影響力は中国国内にとどまらず、いや中国国内以上に日本にも及び、幕末の日本人に少なからぬ「情報」の恩恵を与えたのである。

一八六〇年代に入って、従来の伝道や洋書翻訳の姿勢をめぐる宣

教師間の意見対立により、墨海書館の活動は急速に衰えた。[10] そして印刷担当で漢訳洋書の中心的な存在であるワイリーが一八六〇年一一月に休暇でイギリスに帰国した後、まず印刷業務の大部分が、新しく寧波から上海に移転してきたアメリカ長老会所属の美華書館（寧波時代の名称は華花聖経書房、一八四四年マカオにおいて創立）に譲られ、さらに間もなく印刷設備そのものも『上海新報』の発行を準備している字林洋行に買い取られてしまった。こうして墨海書館はついにその黄金時代の幕を閉じることになったのである。

注

（1）阮仁沢・高振農編『上海宗教史』、上海人民出版社、一九九二年。
（2）張仲礼編『東南沿海都市と中国近代化』、上海人民出版社、一九九六年。
（3）吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』、汲古書院、一九九七年。
（4）コーエン著、雷頤・羅検秋訳『在伝統与現代性之間——王韜与晩清革命』、江蘇人民出版社、一九九八年。
（5）コーエン前掲書。
（6）張志春編『王韜年譜』、河北教育出版社、一九九四年。
（7）汪家熔『商務印書館史及其他』、中国書籍出版社、一九九八年。
（8）曾永鈴『郭嵩燾大伝』、遼寧人民出版社、一九八九年。
（9）方行・湯志均整理『王韜日記』、中華書局、一九八七年。
（10）沈国威編著『「六合叢談」（1857-58）の学際的研究』、白帝社、一九九九年。